

諦（あきらかなること）

「事実は小説より奇なり」この言葉は、十八世紀生まれのイギリスの詩人バイロンのものですが、当時の欺瞞と偏見に満ちた社会を痛烈に批判したバイロンらしい物事の核心を見事に突いた言葉だといえます。いつの世も、常識というもつともらしきとは裏腹に、事実はあつと驚くような複雑怪奇な様相を呈するものであることは、私たちはすでに、歴史や人生経験において学んだはずですが。しかし、多忙な日常に追われて、現実に対してつい短絡的で拙速な説明や答え、よく言えば単純明快でシンプルな説明や答えを求め理解できたとみなして安心したいのです。ところが、自然科学のように答えが一つだけというわけにいかないのが、人間社会の問題の特徴でもあります。

新聞やテレビといったマスコミは、単純な答えが出ない事件に大幅なスペースや時間を割きます。この夏の北朝鮮ミサイル問題という国際問題から秋田県藤里町の小学生殺人事件のような地方の事件まで、複雑な問題には人々の関心が集まります。しかし、お客様である読者・視聴者が、最終的に理解しやすい単純明快な説明を求めるといふ欲求を持つ以上、マスコミはその期待に応えるべく報道するということとなります。解説者に大勢いるその道の専門家を総動員しているはずなのに、どのチャンネルでも同じ顔が出ているのは、マスコミが望む専門家が少ないということなのかもしれません。

小泉政権下、劇場型の政治が理解しやすいと評価され、政権の支持率を支えてきました。それはそれで長所もあるわけですが、単なるパフォーマンスとして批判の対象ともなってきたのも事実です。

私たちが世界を理解することにおいて、情報量の飛躍的な拡大がかえって、テレビのニュースをただぼんやり眺めているような受け身の姿勢を強めさせているような気がします。情報量の格段に少なかった江戸時代、学者として有名な新井白石は、密航し捕らえられた宣教師シドツチを取り調べて、『西洋紀聞』を著しましたが、乏しい情報をもとに自らの想像力を駆使しての西洋理解は驚嘆すべきものがあります。

私たちは、簡単に理解できなくて難しいと思うと精一杯理解しようと努力します。しかし、ニュースを見ればすぐにわかるはずだと高を括ると、頭の働きは鈍くなってしまう。要は「事実」・「真相」・「真理」を簡単に理解できるものだとなめてはだめだと思えます。

仏教では、究極の真理の理解を「悟り」と呼びました。仏教の根本であるお釈迦様のお悟りは「四諦（したい）」といえます。四諦とは四つの諦（あきらかなること・真理の意）ということ、苦諦（くたい・世界は苦しみに満ちている）・集諦（じつたい・苦しみに原因がある）・滅諦（めつたい・苦の原因を取り除き消滅させることができる）・道諦（どうたい・苦を消滅させる八正道という具体的方法がある）からなります。お釈迦様がこのお悟りを得られるまでに、まず写真のような姿で苦行され、それでも得られず、苦行を捨てて、菩提樹の下で瞑想に入って悟られたといえます。苦行を極端なものとして退ける教えを「中道」といいます。しかし、簡単に悟りが得られる訳ではないことはいまでもないでしょう。

現在の北朝鮮のミサイル問題や拡大する一方のレバノン危機など戦争に直結しかねない問題に対して、人々が安直な理解に走れば、危険な世論を形成してしまうかもしれません。忙しくて面倒でも知り得た情報を自分でよく考えて、深く理解することが大切です。

「諦（あきらかなること）」を悟ろうと求め続け、この世界は自分にとって「無明（むみょう・あきらかならず）」と謙虚に考え、短絡的で拙速な答えという畏にかからないぞという求道精神は、仏教だけでなく私たちの日々の考え方にも重要な教えであると思えます。





No.23



浄土宗 松林寺

<http://syourinji.com>

